



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	EU国境地域オーストリア・ブルゲンラント州の地域性： 民族共生を踏まえた検討（研究ノート）（fulltext）
Author(s)	加賀美,雅弘
Citation	学芸地理(73): 32-44
Issue Date	2017-12-26
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/149292">http://hdl.handle.net/2309/149292</a>
Publisher	東京学芸大学地理学会
Rights	

## EU 国境地域オーストリア・ブルゲンラント州の地域性 —民族共生を踏まえた検討—

加賀美 雅弘\*

キーワード：国境地域，少数民族集団，多文化共生，ブルゲンラント，オーストリア，EU

### I. はじめに

ヨーロッパ中央部に位置するオーストリアは、内陸国ゆえに多くの国と国境を接している。しかもヨーロッパが東西に分断されていた1989年までは、西側諸国の最東端に位置しており、当時社会主義陣営にあったチェコスロヴァキアやハンガリー、ユーゴスラヴィアと隣接し、その国境は人やモノの移動が著しく制限されていた。国境地域は政治的な緊張の場であり、地続きでありながら国境を隔てて隣接する地域との間の交流は少なかった。そのため、これら国境地域は経済活動が不活発であり、地域振興の課題を抱えた地域として知られてきた(Lichtenberger, 2002: 329)。

冷戦構造の崩壊と社会主義諸国の民主化、さらにはこれらの国々のEU加盟によって、国境を越えた人の移動は劇的に増加した。特にチェコスロヴァキアやハンガリーなど移動を制限されていた人々が、就労を求めてオーストリアになだれ込んできたのをはじめ、ウィーンやアルプスなどの観光地を訪れる人々も急増した(呉羽, 2007: 71)。国境の開放は、安価な労働力や観光客の増加となつて、オーストリア各地の地域経済に一定の経済効果をもたらしてきた(Lichtenberger, 2002: 36)。

しかし、ことオーストリアの国境地域においては、こうした変化は予想に反してさして大きくなかった。それは、国境を越えてくる人やモノのほとんどが国境地域を通過していったからである。国境を越えてオーストリアにやって来る人々の多くは、職場を求めてウィーンなどの大都市を目指し、国境地域にはさしたる関心は向けられなかった。国境地域は経済的な活動への刺激を期待したほど受けられず、結果として経済停滞地域であり続けている(Lichtenberger, 2002: 323-324)。

さらに、国境地域特有の問題もある。ヨーロッパ中部では19世紀以降、ナショナリズムの流れの中で特定の言語集団が政治勢力となる経緯をたどり、各地で言語集団を主体とする主権国家を形成してきた。この傾向は2008年のコンヴォ独立にまで見て取ることができる(加賀美, 2008; 加賀美ほか, 2014: 29-31)。

一方、言語集団の分布と国境線が必ずしも一致しないことから、国境地域にはしばしば隣国の言語集団が少数集団として存在してきた。しかも難しいのは、言語集団の多くが言語によって自己と他者を区別しながらまとまりを強めてきた歴史的経緯があり、これによって国籍は同じでも、異なる言語集団は別の集団とみなす傾向がみられることである(塩川, 2008)。つまり

\* 東京学芸大学教育学部

国境地域は、これら異質の集団が同居し、少なからず社会的な軋轢が生じてきた点でも、課題を抱えた地域と位置づけることができる。

以上のような事情を踏まえると、オーストリアの国境地域は、人の移動の自由化が進んだEU域内の国境地域が多かれ少なかれ直面する事情、すなわち、人の移動の激化、経済の停滞、多様な集団の共生、という国境地域の問題を検討する上で恰好の対象であると思われる。このたびオーストリアとハンガリーの国境地域を取り上げ、地域の変容に関する研究プロジェクトを発足したが、それは、これらの課題を抱えた地域の動向を明らかにすることが、EUの地域問題の検討へと発展できると考えるからである。

冷戦後のオーストリアとハンガリーの国境地域の変化については、地理学における成果が多々ある。中でもSeeger and Beluszky (1993)は、両国の地理学者の共同研究の成果として評価が高い。地域間関係や農業、民族集団、農村生活など広範なテーマについて、その変化が検証されている。ただ、調査内容が冷戦終了直後の短期的な変化に目を向けたものであり、その後の変化に関する検討が望まれている。

冷戦が終わって四半世紀以上たった現在において、国境地域がいかなる変化を遂げているのか。この課題に向けてここでは、オーストリア・ブルゲンラント州の歴史的経緯をまとめ、特に民族の共生をめぐる課題を整理したい。

ブルゲンラント州は、オーストリア最東端に位置する。オーストリアは九つの州からなる連邦国家であり、それぞれの州にはかなりの自治が委譲されている(第1図)。州の領域は、チロルのような伯爵領やザルツブルクのような司教領など中世以来の固有の歴史をもつ地域をベースにしている。そうした中で、ブルゲンラント州は、第一次世界大戦後に国境の変更に伴って初めて形成された地域であり、地域的なまとまりをもってからの歴史が浅い。

その一方で、この州には多様な言語集団が同居しており、国境線の開放とともに変化する地域において、無視できない存在になっている。近隣の国々と同じ言語を話し、場合によっては同じ帰属意識をもっており、オーストリアにありながら、異なるアイデンティティをもつ人々が居住することが、ブルゲンラント州の住民の暮らしや地域の経済的發展と微妙に関わって



第1図 オーストリアとブルゲンラント州

出典：浮田ほか (2015: 40)

る (Kocsis and Wastl-Walter, 1993).

## II. 国境地域ブルゲンラントの歴史的経緯

現在のブルゲンラント州一帯は、中世以来、ハンガリー王国の支配下に置かれ、ハンガリー系貴族の所領が各地にみられた。16世紀半ばにハプスブルク家の所領となったものの、神聖ローマ帝国の領域の外に位置し、20世紀初頭までハンガリーの領土であり続けてきた。

その間、ハンガリー系住民が居住する一方で、西方から次第にドイツ系住民が進出したために、この地域は両住民が混住する地域になっていった<sup>1)</sup>。また、16世紀にハンガリー王国領の大半がオスマン帝国の支配下に入ると、この地域が帝国の支配を免れたことから、クロアチア系の難民が流入した (Wilheom-Sempim, 2008)。このほか、もともとカトリックの地域でありながら、18世紀に労働力としてカルヴァン派の人々を積極的に受け入れたために、異なる宗派の住民が混住する地域にもなった。

第一次世界大戦後、この地域の状況は大きく変わる。大戦でのオーストリア・ハンガリー帝国の敗北とともに、チェコスロヴァキアなどいくつもの国が成立したことから、敗戦国であるオーストリアとハンガリーの国境線を新たに確定する必要が出てきたのである。

オーストリアは終戦直後の1918年に、ドイツ語を母語とする人々が住む地域をオーストリア共和国として宣言し、西ハンガリー地域 Deutsch-Westungarn の領有を主張した。そして戦後オーストリアの国境を決めるサンジェルマン条約 (1919年) では、西ハンガリー地域のうち、すでにチェコスロヴァキアの領有が決まっていたプレスブルク Preßburg (現スロヴァキアのプラティスラヴァ) を除く地域がオーストリア領として承認された<sup>2)</sup>。

一方、ハンガリーの国境を確定したトリアノン条約 (1920年) は、ハンガリーにとっては過酷な内容であった。かつてのハンガリー王国の領土の71%が失われ、トランシルヴァニア地方 (現在のルーマニア西部) やヴォイヴォディナ地方 (現在のセルビア北部)、スロヴァキア南部など国外に数百万のハンガリー人を残すという、ハンガリーにとっては屈辱的な結果となった。同年11月には西ハンガリー地域のオーストリアへの割譲を承認したものの、国内の右派勢力の不満が膨れ上がり、西ハンガリー地域の帰属をめぐる翌1921年8月末からハンガリー義勇軍とオーストリア警察との武力衝突に発展する。イタリアの仲裁のもと国境の再確定をめぐる住民投票が実施され、かろうじて西ハンガリー地域の中心都市エーデンブルク Ödenburg (現ハンガリーのショプロン) がハンガリーに取り戻された。

ブルゲンラント州は、こうした経緯の中、1921年に成立した。ブルゲンラントの名称は、1919年初頭に提案されたフィーアブルゲンラント Vierburgenland (四つのブルクがある地域の意味) にちなんでいる。それは西ハンガリー地域の四つの主要都市であるプレスブルク、ウィーゼルブルク Wieselburg (現ハンガリーのモション)、エーデンブルク、アイゼンブルク Eisenburg (現ハンガリーのヴァシュ) をさしている。しかし、これらの都市がすべて隣国のものとなったことから、発足したブルゲンラント州は当初から中心都市を欠いた縁辺の性格をもつことになった。1925年にブルゲンラント州の州都としてアイゼンシュタット Eisenstadt が選ばれるが、人口わずか6,796 (1923年) にすぎないこの都市は、かつてのハンガリー貴族エステルハージ家の居城があることで知られるものの、州の中心をなすにはあまりにも小さかった (第2図)。



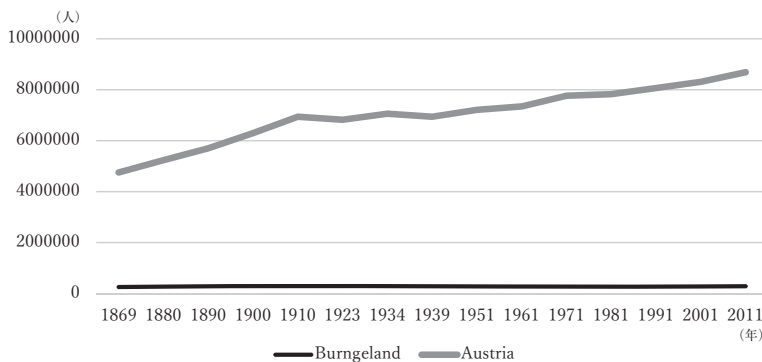
第2図 アイゼンシュタットのエステルハージ宮殿  
(2016年8月筆者撮影)  
エステルハージ家の宮廷楽長ハイドンが演奏  
したことで知られる。

こうして中心都市のないまま発足したブルゲンラント州は、つねに経済問題に悩まされ、行政組織の再編成や交通・通信網の整備など地域構造の整備が課題であり続けてきた。このことと連動して、この地域は人口流出が顕著でもあった。特にウィーンから遠く離れた州の中部と南部では、1920年代から1930年代にかけて大量のアメリカ移民が流出した。当時、移民向けの船舶会社はヨーロッパ各地の経済停滞地域に目をつけて多くの移民を集めており、ブルゲンラント州でも南北アメリカへの移住をさかんに

持ちかけ、多くの人々が大西洋を渡った。その際、この地域ではハンガリー時代からの均分相続法が継承され、移住費用を支払える子どもが多かったことも、多くの移住者を出す結果になった (Duschaneck, 2009 : 228)。

第二次世界大戦後、国境の通行が鉄のカーテンによって阻まれると、ブルゲンラント州の経済状況はさらに落ち込んでゆく。このことは人口の変化に如実にあらわれている (第3図)。1869年の州の総人口254,301は、1934年には299,447、1951年には276,136へと低下し、さらに1981年には269,771にまで減少した。この間、オーストリアの総人口が4,497,880 (1869年) から6,760,044 (1934年)、6,933,905 (1951年)、7,555,338 (1981年) へと順調に増加してきたとは対照的である。

1989年に始まった旧社会主義諸国の民主化と、それに伴う国境の開放によってこうした停滞傾向にはようやく変化が起これり、1990年代以降、人口も増加に転じ、2001年には277,569にまで回復した。さらに2004年のEU拡大と、2007年にハンガリーがシェンゲン協定の実施に踏み切り、国境を越えた移動が完全自由化したことに伴って、地域経済は刺激を受け、2015年の総人口は285,685に達している。



第3図 オーストリアとブルゲンラント州の人口の推移 (1969～2011年)  
(資料 : Statistik Austria)



### Ⅲ. ブルゲンラント州の地域的特性

ブルゲンラント州は、面積3,965.46km<sup>2</sup>。特別市のウィーンを除けば、国内最西端のフォアアールベルク州に次ぐ小さな州である。南北に長い領域をもち、東側が全長397kmに及ぶ国境線をなしており、その大部分はハンガリーと接している。地形は、ハンガリー平原の西端に位置していることから比較的平坦で、南に行くにしたがって丘陵地となるものの、州内最高峰ゲシュリーベンシュタインGeschriebensteinも標高884mにすぎない。しかもオーストリア国内の他の地域に比べて日照量が多いことから、北部を中心に有数の農業地域になっている。

州北東部にはノイシードラ湖Neusiedler See (約1,120km<sup>2</sup>)があり、その一部がハンガリーとまたがっている。この湖は最大水深が2mたらずで、内陸性の乾燥した気候下にあることから、これまでに干上がって湖面が消失することもあった。湖岸にヨシの群落が発達し、渡り鳥の経由地であるなど豊かな自然が残されており、湖一帯は1993年に国立公園、さらに2001年にはユネスコの世界遺産（自然遺産）に登録されている。

近年のブルゲンラント州の変化は、①国境通行の自由化と②EUが支給する地域振興補助金に負うところが大きい。以下、それぞれについてまとめてみよう。

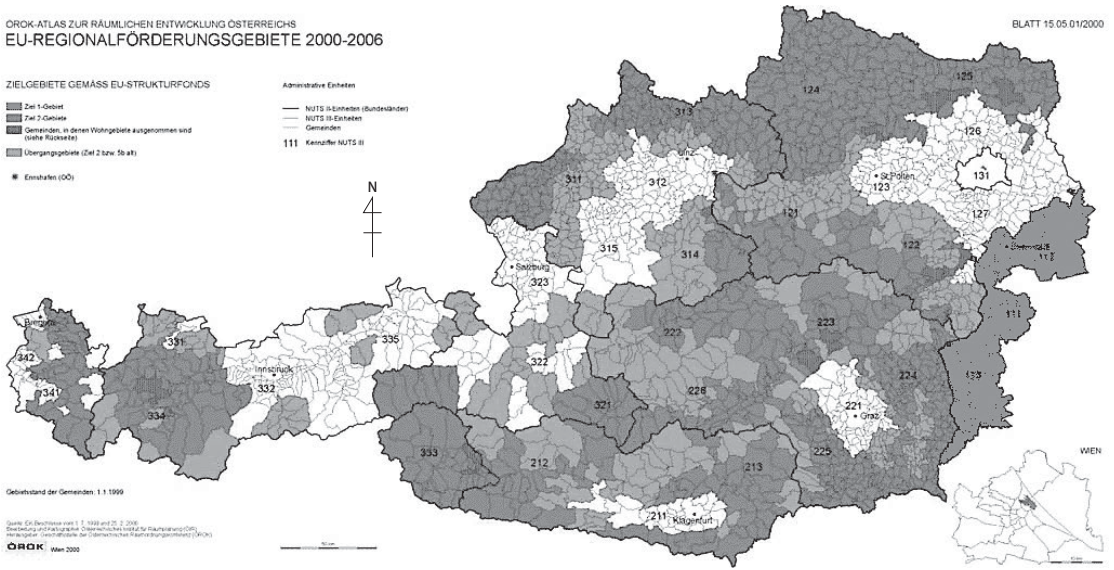
①ハンガリーとの国境は、大戦後の1949年にハンガリー人民共和国が成立して以後、厳しくコントロールされ、1956年のハンガリー動乱で多くのハンガリー国民が監視の目を潜り抜けてオーストリアに亡命したことが世界的に伝えられると、悲劇の象徴とされた。東西ヨーロッパ分断の時代には、ここは経済的な魅力に乏しい停滞地域であり続けた。

1970年代にオーストリアとハンガリーの国籍

保有者に限って移動が自由化されたものの、正常化したのは1989年のハンガリーの民主化以後のことになる。1989年8月19日の汎ヨーロッパ・ピクニック<sup>3)</sup>に参加した600人以上の東ドイツ国民がハンガリーからオーストリアへの徒歩での国境越えに成功すると、東西ヨーロッパ間の国境は一気に開放され、冷戦体制は崩壊してゆく。そして2004年にハンガリーがEU加盟し、さらに2007年にはシェンゲン協定の実施によって、国境の移動は完全に自由化された。ウィーンとブダペストを結ぶ幹線交通では、ハンガリー側の鉄道駅ヘジェシュハロムHegyeshalomでなされてきた国境通過のための検問が廃止され、高速道路の検問所は機能を失った。その結果、西ヨーロッパの最果てだったブルゲンラント州は、人とモノが流動する場所へと変わっていった。

②経済停滞地域として認定され、地域振興のための補助金が投入されたことも、ブルゲンラント州の地域変化の原動力となった。1995年にはEUの経済振興地域Ziel-1に指定され、2013年まで補助金が投入された。第4図は2000年から2006年にオーストリア国内においてEUの地域振興補助金が付与された地域を示している。オーストリア国内の山岳地など広い地域がZiel-2の経済振興地域に指定されているが、ブルゲンラント州はより深刻な経済停滞地域であるZiel-1に指定され、多額の補助を得ているのがわかる。

また、地域統合を進めるEUが実施する越境地域連携事業INTERREGとも関わっている。この事業は、国境を挟んだ自治体同士が連携して地域おこしに取り組むための補助金であり、EUのほぼすべての国境が対象になっている。1990年に開始されて以来、INTERREG I (1990～1993年)、同II (1994～1999年)、同III (2000～2006年)、同IV (2007～2013年) を経て、現



第4図 EUの地域振興補助金が付与された地域(2000～2006年)

出典：<http://www.oerok.gv.at/eu-regionalpolitik/eu-strukturfonds-in-oesterreich-2000-2006/foerderfaehige-regionen.html>

在はINTERREG V-A (2014～2020年)が実施中である。国境の開放とともに国境地域の振興を目指す支援事業であり、オーストリア国内では、すべての国境地域でさまざまなINTERREGによる事業が実施されている。

ハンガリーとの国境地域でも、工業団地の造成をはじめ、分断されていた道路や通信回線の整備、無人化していた国境地帯の自然保護や汚染物質の除去などが積極的に進められている。たとえばブルゲンラント州南部の国境の町ハイリゲンクロイツHeiligenkreuzと、これに隣接するハンガリーのセントゴットハールドSzentgotthárdに、1995年から造成が始まった工業団地があげられる。ここでは、繊維大手のレンチング社や自動車メーカーのオペル社などの大工場が立地し、両国に多くの雇用機会を提供している。

このほか越境地域連携事業の重要な課題として、国境を越えた住民同士の連帯感の醸成があげられる(飯嶋, 2011: 125)。これまでヨー

ロッパの多くの国境地域は少なからず反目や対立の場であり、侵略や迫害・追放の現場であった。そこで地域統合にとって国境を越えた住民間の相互理解は不可欠であり、市民レベルでの交流事業やイベントの共同開催などを通して、より緊密な関係を目指した活動が進められている。

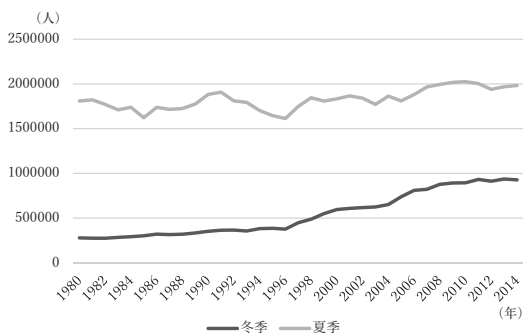
以上のような国境の開放と補助金の確保によって、地域の産業には大きな変化があらわれている。そもそもこの地域は、肥沃なハンガリー平原の一部として、コムギや野菜、ブドウなどの栽培を中心した農業が発達してきた。特に近年は、ブドウ栽培とワイン生産への関心が高まっており、ブラウフレンキッシュBlaufränkisch種のような地域特有の赤ワインを中心にした市場の開拓・販路拡大をめざす醸造業者も増えている。

また、観光開発にも重点が置かれ、観光地の整備やイベント開催などが行政を中心に推進されている。ブルゲンラント州の観光は、多くの

観光客でにぎわうノイシードラ湖畔をはじめ、もともと夏の観光地が多い。そこでコウノトリの飛来で知られるルストLustの集落景観の整備やメルビッシュ Mörbischで毎年夏に開催される湖上音楽祭の支援、スポーツ施設の充実がなされている(第5図)。その一方で最近では、温泉観光が盛んになって冬にも多くの観光客が訪れるようになった。2014年の州内の総宿泊客数をみると、2,910,587人のうち夏(5~10月)の宿泊客数が1,983,390人(68.1%)を占めているが、かつて1980年には総宿泊客数2,088,097人のうち、夏が1,809,620人(86.7%)を占めていたことから、近年の冬の観光の発達を知ることができる(第6図)。実際、ルツマンブルク



第5図 ノイシードラ湖畔の町ルスト(2016年8月筆者撮影)  
正面の煙突の上でコウノトリが営巣している。



第6図 ブルゲンラント州における宿泊客数の推移(1980~2014年)  
(資料: Statistik Austria)

LutzmannsburgやバートタツマンズドルフBad Tatzmannsdorfなどの温泉施設の整備も進められており、オーストリア国内だけでなくハンガリーをはじめヨーロッパ東部の国々からも多くの観光客を集めている。さらに、比較的平坦な地形を利用したサイクリング道路の整備などが進められている。2013年に設定がほぼ完了したヨーロッパ長距離サイクリングルートの一つ「鉄のカーテンIron Curtain Trail (ICT)」も大きな観光資源となっており、観光客誘致の取組みが積極的になされている(第7図)。



第7図 サイクリングロード「鉄のカーテン」(2016年8月筆者撮影)  
右奥の道路がオーストリアとハンガリーの国境に沿って延びている。

以上のようにブルゲンラント州は1990年代以来、着実に変化を遂げている国境地域とみなすことができる。しかし、オーストリア国内においてブルゲンラント州の経済は依然として低いレベルにあることを述べなければならない。州北部ではウィーンへの通勤が可能で、またウィーンからの観光客を得やすいなど、比較的雇用機会に恵まれているのに対して、南部では経済の変化は緩慢であり続けている。結果として南北間の格差が大きく、州全体としての経済水準は伸び悩んでいるのが現状である(Lichtenberger, 2002: 363)。



#### IV. 少数民族集団に向けた取組み

ブルゲンラント州は、多様な言語集団がみられる点でオーストリア国内でも特徴的である。そもそもドイツ語圏とハンガリー語圏の境界地域としての性格をもつ地域であり、クロアチア系住民やロマが加わる多文化地域であった。さらに、第一次世界大戦後の国境の変更によるドイツ系やクロアチア系の人々の移動、第二次世界大戦後のハンガリーからのドイツ系住民の追放などを経て、この地域は多様な言語集団が居住する地域として今日まであり続けている (Kocsis and Wastl-Walter, 1993)。

2001年1月の国勢調査によれば、ドイツ語を母語とするのが総人口の90.6%を占める一方で、ブルゲンラント・クロアチア語が6.1%、ハンガリー語が1.8%、クロアチア語が0.4%、ロマ語0.1%、スロヴァキア語0.1%など、割合こそ小さいものの、きわめて多彩な構成になっている (第1表)。

オーストリアでは1976年の「民族集団法」によって、国内に居住する六つの言語集団 (クロアチア語、スロヴァキア語、スロヴェニア語、チェコ語、ハンガリー語、ロマ語) が公式の少数民族集団として認定され (金子, 2005b: 209)、それぞれが存続できるための多面的保護政策が実施されてきた。特に多様な言語集団が

第1表 日常語からみたブルゲンラント州の言語集団 (2001年)

日常語	人口	
	(人)	(%)
ドイツ語	240,228	90.6
ブルゲンラント・クロアチア語	16,245	6.1
クロアチア語	996	0.4
ハンガリー語	4,704	1.8
ロマ語	263	0.1
その他	2,569	1.0
合計	265,005	100.0

(資料: Statistik Austria)

居住するブルゲンラント州では、彼らのための教育や補助がなされている。

たとえば地名表記については、1993年にEUの欧州評議会において少数民族集団の地名表記を公用語表記と併記する勧告が出されて以来、複数言語による表示が進められてきた (加賀美, 2018)。オーストリアでは、2000年5月の閣議で特定の少数民族集団が総人口の25%以上を占める集落における二言語表記を義務づけており、順次実現されている。その結果、ブルゲンラント州では現在、ドイツ語とクロアチアの二言語表記が47集落、ドイツ語とハンガリー語の二言語表記が4集落でなされている。これは地名だけでなく、公的施設や文書でも二言語による表記が実現されている<sup>4)</sup>。

州中央部の中心都市オーバーワートOberwart (ハンガリー語名フェルシェーエールFelsőőr) は、とりわけ少数民族集団の割合が高く、国内有数の多文化社会に直面する都市として知られる (第8図)。2001年の母語別の人口構成は、総人口5870万のうちドイツ語78.4%、ハンガリー語17.7%、ロマ語1.2%などとなっており、ドイツ語集団が圧倒的とはいえ、多様な言語集団が居住している (第2表)。



第8図 二言語で表記されたオーバーワート (2017年10月筆者撮影)

ドイツの語の下にハンガリー語の名称が記されている。

第2表 オーバーワートの言語集団 (2001年)

日常語	人口	
	(人)	(%)
ドイツ語	4,603	78.4
ハンガリー語	1,039	17.7
ロマ語	69	1.2
ブルゲンラント・クロアチア語	20	0.3
その他	139	2.4
合計	5,870	100.0

(資料：Statistik Austria)

実際、オーバーワートでは、少数言語集団の言語・文化の保護と維持に関するさまざまな事業が積極的になされている。二言語学校教育はそうした取組みの一つであり、少数民族集団の言語と文化に関する教育が実施されている。たとえば1992年に開校した二言語連邦ギムナジウムZweisprachiges Bundesgymnasiumでは、ハンガリー語ないしクロアチア語を母語とする生徒向けの教育が実施されている(第9図)。具体的には、クロアチア語の学習のほかに、地理と歴史の授業でクロアチア系住民が暮らす集落や伝統的な生業、彼らがたどってきた歴史を学習し、音楽の授業では伝統的な民謡や楽器について学ぶ。そのためのテキストが州政府から提供されるほか、ギムナジウムで独自の教材も作成している。



第9図 二言語連邦ギムナジウム (2016年8月筆者撮影) 学校としてだけでなく、市民の交流イベントなどにも利用されている。

このほか、ハンガリー系、クロアチア系、およびロマそれぞれの団体が組織され、少数集団のための自主的な活動が行われている。ハンガリー系集団では、ブルゲンラント・ハンガリー文化協会Burgenländisch-Ungarischer Kulturvereinがある。これは1968年に設立され、「民族集団法」制定以来、国から支給される補助金を活用したハンガリー系住民間のコミュニティの維持や、伝統文化の維持・継承を目指す活動を行っている。オーバーワートに近接する町ウンターワートでは、ハンガリー系住民が主導の郷土祭りを支援している。

クロアチア系集団には、1929年に設立されたクロアチア文化協会Kroatischer Kulturvereinがある。クロアチア系集団間のコミュニティの維持や伝統文化の維持・継承を目指す点では、ハンガリー系と類似している。たとえばクロアチア系の文化をアピールする場として、キャンプファイアを囲んでタンブリカというクロアチア固有の弦楽器を演奏するTamburica am Lagerfeuerと呼ばれる祭りが20年以上続けられている。

いずれの集団も、設立当初は言語の維持・継承に力が入れられていた。しかし、オーストリアでは、これらの言語を母語とする人口は減少傾向にあり、オーバーワートでも少数言語集団の数は減少傾向にある。オーストリアにおいてこれらの言語集団は着実にドイツ語を使用するようになってきているからであり、そのために文化協会も言語の保護や継承をそれほど重視していない。これに対して文化活動としての歌唱や踊り、楽器演奏などが趣味として積極的に取り組まれている。そうした余暇を通して民族集団としての意識を共有したり、次の世代に継承したりすることに関心が向けられている。ハンガリー系やクロアチア系の人々のイベントは、同じ文化をもつ人々同士の接触の場として機能

し、固有の言語が失われつつある一方で、民族アイデンティティが保持されている。

これに対してロマの事情は異なっている。オーバーワートは比較的多くのロマが住む町として知られる。正確な人口は明らかでないが、オーストリア国内の主なロマ組織がこの町を本拠にしていることから、彼らにとって重要な場所であることがわかる。

オーストリアのロマは、大きく六つのグループからなる。その一つがブルゲンラント・ロマであり、主にブルゲンラント州に住んでいる(滝口, 2012: 134)。彼らはもともとハンガリー西部に居住していたのが、15世紀頃に現在地に移動し、20世紀にはそのほとんどが定住した。ローマカトリックを信仰し、かご作りや鍛冶、ほうき・ブラシ作り、楽器演奏などを伝統的な生業としてきた。しかし、1930年代から大戦中にかけて政治的迫害に遭遇し、甚大な被害を受けた。オーバーワート郡ではほぼすべてのロマが強制収容所に連行され、生還したのは7%しかなかった(金子, 2005a: 173)。

ブルゲンラント州において、オーバーワートは比較的多くのロマが住む町として知られる。市内には、1989年に設立されたオーストリア国内最初のロマ団体であるオーバーワート・ロマ協会Verein Roma Oberwartがある。ロマの不安定な生活状況の改善が目的で、若者の高郁也レジャーの指導を行っているほか、偏見を取り除くためのロマ以外の人々との交流や、ロマ固有の伝統文化の継承などに取り組んでいる。さらには個人の社会経済的問題についての相談や、就業のためのアドバイスも行っている。

また、1999年にはブルゲンラント市民大学の一つとして、ブルゲンラント・ロマ市民大学Volkshochschule der Burgenländischen Romaがオーバーワートに設置された。これはロマを支援する人材の育成が主な目的とされ、ロマと

非ロマの人々が参加して、ロマの文化だけでなく、社会的状況についての学習が行われている。また、ロマを理解するためのイベントとして、ホロコーストからの生存者の語りなども実施されている。

このようにロマに対する支援は、ロマ自身と行政の両面から強化されている。オーバーワートでは1995年2月5日夜、ロマ集落近くで起こった爆弾テロによって4人のロマの若者が犠牲になった。そこで事件の記憶をとどめるためにオーバーワート・ロマ協会が中心になって1998年に追悼碑が建てられ、差別問題解決に向けた活動が続けられている(第10図)。また2011年には、ブルゲンラント州のロマ語がユネスコの無形文化遺産に登録されるなど、共生に向けた努力がなされている。

最近ではロマ自身の活動も活発になっている。ロマ協会の活動がなされる中、政治家や研究者の協力を得ながら音楽祭や舞踏会、文学や詩の朗読会など独自の文化を一般に向けて紹介する活動が目立ってきている(滝口, 2012: 144)。オーバーワート出身の音楽バンド「ロmano・ロートRomano-Roth」は、ロマの伝統音楽を交えた演奏活動で人気を得ている。



第10図 オーバーワートのロマ追悼記念碑(2017年10月筆者撮影)  
ロマ差別撲滅への願いがロマ語、ドイツ語、英語で記されている。

オーストリア社会においてロマに対する抵抗意識が依然として存在し、彼らを排除しようとする動きがあることは否定できない。しかし、彼ら独自の文化を通じた交流の場を生み出されていることも確かで、観光資源として注目されることによって、より広い関心が集まるのが期待されている。

以上のように、オーバーワートに住む少数言語集団は、大きく二つのタイプに分かれる。一つは、ハンガリー系やクロアチア系のように、自身のアイデンティティをもち、早くから固有の言語や文化の維持・継承を主張してきた集団がいる。彼らはオーストリア社会と密接なかかわりをもち、社会経済的な地位を高め、余暇の一環として伝統文化を維持・継承し、自身の存在をアピールしている。これに対して、ロマは差別の対象であり続け、自身の主張をほとんど行っていない。今日に至るまで社会経済的な地位が低く、就業・就学の機会も十分に得られていない。そのためロマ協会は、彼らの社会経済的地位の向上のための支援に取り組んでいる。

こうした集団間の違いは、現在進行しているEU拡大によって共通市場の拡大や、国境を越えた就労の自由化への対応にも違いみられるように思われる。今後の調査の課題であるが、2017年10月に現地で開催した各協会での聞き取り調査によれば、ハンガリー系やクロアチア系には、新しい就労先の開拓や観光客への対応など、国境の開放をビジネスチャンスとしてとらえる傾向があるのに対して、ロマにとって国境の開放は、流入する安価な労働力や激化する市場競争に十分に対応しきれず、厳しい局面を迎えている状況にあるという。国境開放が少数民族集団にとって多様な変化をもたらしており、国境地域の変化との関係を具体的に明らかにしてゆく必要がある。

## V. おわりに

国境地域は、言うまでもなく国家間の関係が露呈する場所である。国境を越えた人やモノの移動の自由度は国家によって規定される。地域が開放的で自由な状況になるか、それとも閉塞的で緊迫した状況になるかは国家の政策次第になる。

その一方で、国境地域は住民の行動や組織化を通して、住民間の多様な結びつきが生じる場所でもある。国籍の異なる人々が接触し、情報を交換し、価値観を共有する可能性を秘めているのも国境地域の特徴の一つであろう。

こうして見ると国境地域は、ナショナルなレベルでのファクターが関与すると同時に、国境地域内での住民間のローカルなレベルのファクターも関わっており、これら両者が相互に関係しあう場としてとらえることができる。

国境地域に住む多様な言語集団の共存に関する議論には、こうした二つのレベルのファクターを念頭に置く必要があるだろう。たとえば国境地域では、学校教育において国家の言語や文化を学習するプログラムが設定され、地域振興事業による地域文化育成など行政による国境地域向けのナショナルな政策が実施されている。その一方で、地方自治体や住民組織、少数言語集団の自主的自助組織には、国境地域独自の個性ある歴史や文化、あるいは少数言語集団独自の文化を維持・継承しようとするローカルな動きがみられる。

そこで、これら二つのレベルのせめぎあいの中に、多様な言語集団の共存の問題を落とし込むことによって、EUが直面する多文化社会のあり方を議論することができるであろう。国境開放と地域統合を目指すEUにおいて、国境地域は多様な言語集団がいかに共存できるのかを考える格好の場であると考えられる。



## 謝辞

この小論を作成するにあたり、オーストリア科学アカデミーのヨルダン教授には貴重な助言をいただいた。深く感謝申し上げる。なお、2017年度科学研究費「基盤研究 (B) (海外学術調査)」(研究代表者：加賀美雅弘、課題番号：17H04536)の一部を使用した。

## 注

- 1) 今日、ブルゲンラント州内には、中世以来のハンガリー系集落としてオーバープレンドルフOberpullendorfとワートWart地区(オーバーワート、ウンターワートUnterwart、シゲトSiget)がある。
- 2) チェコスロヴァキアは、オーストリア・ハンガリー国境地域にクロアチア系住民が少なからず居住していることから、新興のセルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国(1929年にユーゴスラヴィア王国に改称)の領土とつなげたスラヴ回廊を要求した。しかし、ユーゴスラヴィアに隣接するイタリアがこれに強く反対したために、この要求は却下された。
- 3) ハンガリーの改革派のネーメト首相が1989年5月2日にオーストリア国境の鉄条網の撤去に着手したことから、ハンガリー経由で国境を越えられると考えた東ドイツ国民がその直後からハンガリーに殺到するようになった。そこで、ハンガリーの民主化を求める民主フォーラムのメンバーを中心に、彼らをオーストリアに脱出させる事業が企画された。これは表向き「ヨーロッパの将来を考える集会」を国境に近い都市ショブロンで開催し、これに紛れて東ドイツ国民を国境の向こう側に脱出させようとするものであった。これにはハンガリー首相をはじめ、オーストリア側の協力もあり、

600人以上の東ドイツ国民が劇的な越境を成し遂げ、世界を驚かせた。この国境越えの成功は東ドイツ当局にとって大きな打撃となり、同年11月のベルリンの壁崩壊へとつながってゆく。

- 4) 二言語表記をめぐるブルゲンラント州では特に大きな論争になっていない。これは、同国南部のケルンテン州において、スロヴェニア系少数集団居住地で地名の二言語表記をめぐる暴力と激しい議論が起こったのとは対照的である(Pandel et al., 2004)。

## 参考文献

- 飯嶋曜子(2011):統合するヨーロッパと国境地域. 加賀美雅弘編『EU(朝倉世界地誌シリーズ3)』pp.119-131. 朝倉書店.
- 浮田典良・加賀美雅弘・藤塚吉浩・呉羽正昭(2015):『オーストリアの風景』ナカニシヤ出版, 188p.
- 加賀美雅弘(2008):コソヴォ問題から読み解くヨーロッパ. 新地理, 56-1, pp.31-37.
- 加賀美雅弘(2018):ヨーロッパにおける地名表記に関する検討. 東京学芸大学紀要人文社会科学系Ⅱ, 69, pp.29-41.
- 加賀美雅弘・川手圭一・久邇良子(2014):『ヨーロッパ学への招待―地理・歴史・政治からみたヨーロッパ, 第二版』学文社, 242p.
- 金子マーティン(2005a):ブルゲンラント・ロマ小史. 加賀美雅弘編『「ジプシー」と呼ばれた人々―東ヨーロッパ・ロマ民族の過去と現在』pp.157-198. 学文社.
- 金子マーティン(2005b):オーストリアにおけるロマ民族の法的地位. 加賀美雅弘編『「ジプシー」と呼ばれた人々―東ヨーロッパ・ロマ民族の過去と現在』pp.199-236. 学文社.
- 呉羽正昭(2007):観光地域の発達と観光行動

- の変化. 加賀美雅弘・木村 汎編『東ヨーロッパ・ロシア (朝倉世界地理講座10)』pp.62-73. 朝倉書店.
- 塩川伸明 (2008) : 『民族とネイション — ナショナルリズムという難問』 岩波書店, 214+9p.
- 滝口幸子 (2012) : オーストリアのロマに見る市民参入へのストラテジー — 民族的アイデンティティの選択と自主的自助組織の活動から. 石川真作・渋谷 努・山本須美子編『周縁から照射するEU社会 — 移民・マイノリティとシティズンシップの人類学』 pp.130-150. 世界思想社.
- Duschaneck, M. (2009) : Sprachliche und religiöse Minderheiten im Burgenland. In *Das östliche Österreich und benachbarte Regionen: Ein geographischer Exkursionsführer*, eds. H. Hitz and H. Wohlschlägl, pp.219-240. Wien: Böhlau Verlag.
- Kocsis, K. and Wastl-Walter, D. (1993) : Ungarische und österreichische Volksgruppen im westpannonischen Grenzraum. In *Bruchlinie Eiserner Vorhang: Regionalentwicklung im österreichisch-ungarischen Grenzraum*, eds. M. Seger and P. Beluszky, pp.167-223. Wien: Böhlau Verlag.
- Lichtenberger, E. (2002) : *Österreich*, 2nd ed. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- Pandel, M., Polzer, M., Polzer-Srienz, M. and Vospernik, R. ed. (2004) : *Ortstafelkonflikt in Kärnten: Krise oder Chance?* Wien: Braumüller.
- Seger, M. and Beluszky, P. ed. (1993): *Bruchlinie Eiserner Vorhang: Regionalentwicklung im österreichisch-ungarischen Grenzraum*. Wien: Böhlau Verlag.
- Wilhelm-Stempin, N. (2008): *Das Siedlungsgebiet der Burgenlandkroaten in Österreich, Ungarn, Mähren und der Slowakei*. Norderstedt: Book on demand.

## **Regional Character of Burgenland in Austria as an EU Border Region: Discussion on Ethnic Symbiosis**

**KAGAMI Masahiro\***

**Keywords** : border region, ethnic group, multicultural symbiosis, Burgenland, Austria, EU

\*Department of Geography, Tokyo Gakugei University